

## 弘法大師と道家

静 慈 圓

本論文では、弘法大師と中国哲学という枠組みの中で、大師と道教との関係を明確にしていきたい。特に「道家」と題したのは道家の語が意味する『老子』・『莊子』においてこの問題を考えようとするからである。つまり道教の根本聖典である『老子』・『莊子』を大師がいかに理解し摂取しているかを明らかにしようとするものである。

資料としては、大師の側からは『三教指帰』と『遍照發揮性靈集』（以下『性靈集』と略す）を掲げる。道家の側からは『老子』・『莊子』である。

研究の方法としては、まず『性靈集』・『三教指帰』の一字索引を作り、これと『老子』・『莊子』を、漢字の上で一字ずつ合わせ、次いで単語の上で合わせ、さらに文章の意味の上から検討を重ねて、『老子』・『莊子』からの影響個所を明らかにした。

### 『莊子』と『性靈集』・『三教指帰』

初めに、『性靈集』・『三教指帰』の文中に『莊子』の同じ

場所からの引用箇所が見えるのでこれを検討していきたい。

(莊)①北冥有魚。其名爲鯢。鯢之大。不知其幾千里也。化而爲鳥。其名爲鵬。鵬之背。不知其幾千里也。怒而飛。其翼若垂天之雲。是鳥也。海運則將徙於南冥。南冥者天池也。(逍遙遊篇) ②有鳥焉。其名爲鵬。背若泰山。翼若垂天之雲。搏扶搖。羊角而上者九萬里。絕雲氣。負青天。然後圖南。且適南冥也。(逍遙遊篇)

(性)①若使繫麟足於釜籠。籠鵬翼於樊籬。責其滅沒課之垂天。豈不難哉。(四四〇頁) ②夫尺水本無萬里之鯢。培塿何有千丈之幹。(四三九頁) ③鸞鳳梧桐集。大鵬臥風床。(四〇二頁)

(三)①夫學鱗濫觴。會無由見千里之鯢。霧鬬藩籬。何能知有九萬之鵬。(佛教) ②察莊鵬之將。見淮犬之迹。(道教)

『莊子』は、開卷まず常識的な世界を超えた巨大な鵬・鯢を登場させる。文意は次の如し。①は、世界の北の果ての海に魚がいた。魚の名は鯢といい、その大きさは何千里あるか

量り知れない。この魚が生まれ変つて鵬という名の鳥に変化する。この鳥の背の広さは幾千里あるかわからない。勢い込めて飛び上がると、その翼は青空を覆う雲のようである。この鳥は、海流が方向を変えたと、南の果ての海に移動を始める、となる。②の文意も鵬の説話で①とよく一致する。莊周は、逍遙遊篇の「鵬鯤の物語り」によつて、大鵬の大いなる飛翔は、人間の超越者の境地を象徴したものである、とするのである。つまりこの物語りは、運命を超越した人間の境地を言つていのである。『性靈集』では、この鵬鯤の箇所を次のように引用している。すなわち①は、一日千里を走るといふ麒麟を、竈の如き狭い所に繋ぎ、また一跳九万里といふ大鵬を藩籬の如き狭い場所にとじ込めて、その速疾でないことを責めても、これを大空に放つと、すぐさま高く遠くに至るであらう、となる。ここでは『莊子』の鵬鯤の物語りを踏まえて、先天的な才能のある者は、条件が悪くても目的を成し遂げることができる、との喩である。②は、大師が御自身を謙遜している箇所である。溜り水には、鯤のような大魚は住めない、の意。尺水を大師自身、鯤を皇帝に喩えている。③は、仙境をおもつて大仙の悟境（出家の心境）を慕う詩である。仙境では、かの大鵬のような大鳥が風を床として臥している、となる。『三教指帰』では、仏教・道教を述べる中に一例ずつ見える。①は、仏教を説く文中にある。小

さな水溜りで鰭を動かしている小魚には、大きさ幾千里あるとも知れない大魚たる鯤が住んでいようとは想像もできない。また垣根で羽をばたつかせている小鳥には、九万里の上空を天翔る鵬の存在など理解できない、の意。②は、道教を説く文中にある。つまり仙術を体得したならば、かの莊子に説く大鵬の居所を視察することができる、の意。以上によつて明らかなように、『莊子』の鵬鯤の物語りは、『性靈集』・『三教指帰』共に、よくその文意をふまえた上で引用しているのである。

〔莊〕南郭子綦隱几而坐。仰天而噓。嗒焉似喪其耦。顔成子游立侍乎前。曰。何居乎。形固可使如槁木。而心固可使如死灰乎。〔齊物論篇〕

〔性〕①三密寥寂同死灰。諸尊感應忽來訪。〔五五五頁〕 ②心肝爛離父離母之哭。涕淚溢喪偶喪子之悲。〔五〇六頁〕

〔三〕如喪慈親似失愛偶。〔佛教〕

『莊子』の文意は次の如し。南郭子綦は、窓辺の机にもたれて坐し、天を仰いで大きく息を吐き茫然としている。その姿は「嗒焉」として其の耦に喪に別れたるが似し「すなわち、愛する妻を失つて、茫然として身も心も相手の存在も忘れ去っているかのようなものである。弟子の顔成子遊は、師のその無表情な姿を見て、師の身体が枯れ木そっくりになり、また心は冷えきつた灰のようになってしまつていと思う、となる。つま

り『莊子』では、覺り切つた心境は作為（人爲）を越えたものであるから「無為」と名づける。今の文は南郭子綦がこの無為自然の境地に入つてゐる状態を言つてゐる。『性靈集』①は、「三密寥寂同死灰<sup>云々</sup>」つまり衆生の三業と仏の三密が解け合つた無想無念の境地は、莊周のいう冷えきつた灰のやうに無味乾燥なる心境と同一である、の意。②は、『莊子』の「嗒焉似喪其耦」の意味をとつてゐる。文意は、我々はもし父母妻子に死別するとすれば、心が裂けるばかりに涕淚慟哭して悲哀の淵に沈むであらう、となる。『三教指帰』は、仏教を説く文中に見える。仮名乞児の説法を聞き、亀毛等が一大衝擊をうけ、「愛妻の死に遇えるか如き状態になつた、」の意である。『性靈集』・『三教指帰』共に、実に的確に『莊子』の文意を引用している。

（註）汝不知<sup>レ</sup>夫螳螂乎。怒其臂以當<sup>レ</sup>車轍。不知<sup>レ</sup>其不勝<sup>レ</sup>任也。（人間世篇）

（性）木大力劣成<sup>レ</sup>功太難。譬如<sup>レ</sup>螳螂對<sup>レ</sup>車蚊虻負<sup>レ</sup>嶽。（五二二頁）

（三）①蓋<sup>下</sup>摧<sup>二</sup>虎豹之鉞<sup>一</sup>。拉<sup>中</sup>螳螂之斧<sup>上</sup>。（佛敎） ②爾廻轉<sup>二</sup>一音之鸞輪<sup>一</sup>。摧<sup>二</sup>羣心之螳械<sup>一</sup>。（佛敎）

『莊子』の文意は次の如し。君は螳螂を見たことがあるだらう。かの螳螂が、身のほども弁<sup>わきま</sup>えず臂をふり立てて、道ゆく車の輪に挑みかかつてつぶされるのを。これは螳螂の思ひ上つた愚かさである。『性靈集』の文は、東寺を建立の時

の文章。塔幢の材を運ぶ力の足らないことを螳螂のたとえをもつて明している。『三教指帰』①は、仮名が亀毛や隠士に對して論難の決心を固めた時の文章である。螳螂のちつばげな斧にも似た論難を取り拉ぐ、の意。②は、仏のすばらしい法輪によつて、衆生の螳螂の斧にも似た我執を打ちくだく、の意。『性靈集』・『三教指帰』共に、螳螂のたとえをうまく引用している。

（註）是故鳧脛雖<sup>レ</sup>短。續<sup>レ</sup>之則憂。鶴脛雖<sup>レ</sup>長。斷<sup>レ</sup>之則悲。（駢拇篇）（性）鳧鶴誰非<sup>レ</sup>理。（四〇〇頁）

（三）龜毛之鳧脚未<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>短。隱士之鶴足不<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>長。（佛敎）

『莊子』の文意は次の如し。もともと鳧の脛は短い、これをつぎたして無理に長くすれば苦痛を感じるであらうし、鶴の脛は長い、長すぎるといつてこれを切り短くすれば歎き悲しむであらう。『性靈集』の文は、鳧の足の短いのも、鶴の足の長いのも皆長短そのままに節理に契つてゐる、の意。『三教指帰』の文は、亀毛の論は鳧の脚の如く短いとはいえず、虚亡隠士の論は鶴の足の如く長いとはいえず、まさつてゐるといつても多寡が知れてゐる、の意。いずれも『莊子』の意味をうまくふまえ、万物それぞれに生れつきの生存の条件をそのまま善とし肯定していくという意味で一致してゐる。

（註）郢人墾漫<sup>二</sup>其鼻端<sup>一</sup>。若<sup>二</sup>蠅翼<sup>一</sup>。使<sup>二</sup>匠石斲<sup>之</sup>。匠石運<sup>レ</sup>斤成<sup>レ</sup>風。

聽而斲之。盡レ鑿而鼻不傷。郢人立不レ失容。(徐無鬼篇)

(性雖三郢輪巧思而鉛刀盡レ妙乎。(四四〇頁)

(三) 斲レ蠅飛レ鳶之妙。凌レ匠輪二而翔異一。(儒教)

『莊子』の文意は次の如し。楚の国の都郢やに住む男が、蠅はえの羽ほどに薄く壁土を鼻さきにぬりつけ、名工の匠しやうせき石に斤おので削りおとさせた。匠石は風を切る音とともに斤をふりまわした。男は身動きもしないでなすがままに切らせた。壁土はすっかり切りおとされ、しかも鼻は無傷のままであった。郢の男も顔色ひとつ変えなかつた。つまりこの話は、妙技をふるうためには、呼吸の合つた相手が必要なことを教えている。『性靈集』の文は、かの匠石や公輪般のような工人の名人であつても、鈍刀を以てしては妙技を揮うことは出来ない、の意。『三教指帰』の文は、匠石が鼻端につけた蠅の羽ほどの薄い壁かべを斤で削りおとし、また公輪般が木で造つた鳶を飛ばしそれが三日間も飛んだという話は、神技を發揮したものである、の意。

以上は、『莊子』の同じ箇所からの引用例を『性靈集』・『三教指帰』共に見出し得るところである。この検討によつて明らかなのは、大師は『三教指帰』・『性靈集』共に、『莊子』に関しては、『莊子』の重要な部分を的確に引用している、ということである。これは『三教指帰』を著述した(二四歳)その当時に、すでに『莊子』を克明に分析し、そ

の思想を把握していたといえるのである。  
これに対して『老子』はどうであらうか。

『老子』と『性靈集』・『三教指帰』

『莊子』の時と同じように『老子』と『性靈集』・『三教指帰』の語彙検索を行なつた。その結果、『老子』の同じ箇所が『性靈集』・『三教指帰』の両方に引用されている例は一例も見出し得なかつた。これはどういうことを意味しているのであらうか。この問題を明らかにするために『老子』と『三教指帰』の間で、引用の問題を検討して見た。

その前に、『老子』の内容に触れておく必要がある。『老子』の哲学とは、ごくおおざっぱに言えば、『老子道德経』の名に見られるとおり、道徳つまり「道」と「徳」について説いた教えである。もちろん当時の社会状況を「有為」と呼び、それに対抗してたてる「無為」の中での道と徳という考え方である。従つて『老子』では、政治のあり方では無為の政治論を展開し、また人間のあり方では無為の処世訓を強調する。処世訓の方法は、水の柔軟な喩をもつて主張したり、女性の強靱さの中で喩えられたりする。又文章表現としては、「大象無形」というように否定の逆説の表現をしばしば用いている。

右のような『老子』哲学の主張を鑑みて、『三教指帰』中にみられる『老子』からの引用箇所を検討してみた。その結

果得られた結論は、『三教指帰』中にみられる『老子』からの引用箇所は、いわゆる『老子』の主張する思想、または老子独自の単語の使用例や表現などがみられない、ということである。つまり『老子』を意識して引用したと思われる箇所は見出し得ないのである。

では、大師は『老子』をどのように説破し理解していたのであろうか。この答えは、『老子』と『性霊集』との関係において的確に帰つて来る。つまり『性霊集』中に引用の『老子』からの用例は、どれも『老子』の意味内容を的確にふまえている。

『性霊集』において、『老子』からの引用箇所を検討すると、そこにはいくつかの特色が見られる。その特色は大きく三つに別けることができよう。まず第一には、嵯峨・淳和両帝を賛嘆する箇所に『老子』を引用している。

（老）道可<sub>レ</sub>道非<sub>二</sub>常道<sub>一</sub>。（一章）上徳不<sub>レ</sub>徳。是以有<sub>レ</sub>徳。（三十八章）

（性）伏惟皇帝陛下。道高<sub>二</sub>常道<sub>一</sub>。徳過<sub>二</sub>上徳<sub>一</sub>。軫<sub>二</sub>納隍<sub>一</sub>於萬生<sub>二</sub>憂<sub>一</sub>

物之失<sub>二</sub>所<sub>一</sub>（四四七頁）

『老子』一章は、巻頭の句で、「道」についての原理的な説明を逆説的に説いている。文意は、世間一般の者が、これを守るべきだと考えているもの（仁とか義）、それは絶対的な不変の真理ではない、となる。『老子』三十八章は、「徳」について逆説的に説明している。文意は、最上の徳すなわち真に

道を体得した者の在り方は、己れの徳を意識していない。だから徳があるのだ、となる。『性霊集』の文は、この両文の意味をそのまま使用している。すなわち淳和天皇の「道」は、『老子』のいう「常道」よりも高く、「徳」は、至徳の聖者より以上に勝れている云々となる。

（老）天得<sub>一</sub>以清。地得<sub>一</sub>以寧。神得<sub>一</sub>以靈。谷得<sub>一</sub>以盈。萬物

得<sub>一</sub>以生。侯王得<sub>一</sub>以爲<sub>二</sub>天下貞<sub>一</sub>。其致<sub>一</sub>之一也。（三十九章）

（性）稽古欽明<sub>二</sub>弼<sub>一</sub>唐虞<sub>一</sub>。以大孝得<sub>一</sub>。（四六四頁）②伏惟我皇帝

陛下。百億之一。一得之貞。（五一四頁）

『老子』三十九章は、天地万物は、一つまり道を体得して各々その分を得ていることを説いている。『性霊集』①は、嵯峨・淳和の両帝が高徳の天子といわれ、かの堯・舜の聖帝を凌駕するほどであるのは「一を得ている」からであるとす。②は、伏して惟れば淳和帝におかせられては、百億万人の中の一人であらせられ、一を体得なされた聖天子である、の意。

以上の二例は、嵯峨・淳和両帝を賛嘆する文中に『老子』を引用しているが、『老子』からの引用箇所は、いずれも老子思想で重要な内容を持つ部分である。

第二の特色。大師は、老子の思想は、自らの思想には及ばないとする点で、『老子』を引用している。

（老）玄之又玄。衆妙之門。（一章）②是謂<sub>二</sub>無狀之狀<sub>一</sub>。無物之象。

是謂「恍惚」。(一四章)

(性)雖云三希玄妙忽悅冥然。然猶蜃樓構宮夢幻築室。(四八四頁)

『老子』一章のこの語は、『老子』でいういわゆる「道」を哲学的に説明する文章として、古來ことに有名である。つまりこの玄なるが上にもまた玄なる所、そこがさまざまな微妙な現象を産み出す門なのである、の意。②も同じく「道」を哲学的に説明する文である。つまり不思議な「道」のあり方を説明する言葉として、「無状の状」「無物の象」という『老子』独特の用語を用いている。『性靈集』では、これら『老子』の中樞をなす思想も、蜃氣樓の如き宮殿に等しいとし、『老子』は自らの思想には及ばないとしている。

第三の特色。第三番目は、これら『老子』からの全ての引用二〇例は、大師の後年期において見出せるということである。四一歳の例もあるが、その大部分は五一歳以降の文中に引用されている。これは大師が『老子』に関心を持ち、老子思想を把握した上で自らの文中に引用するようになったのは、ずっと後年になってからであることを示している。大師が、莊子思想の根幹を青年期に擷んでいることと比して対照的であるといえよう。

## 結 語

本論文は、弘法大師が『莊子』・『老子』をいかに理解し撰

弘法大師と道家(静)

取しているかを見てきた。各項における問題と結語は、各場所に示してあるのでそこに譲るが、ただ総括していえば次の如くなる。第一点。『莊子』については、青年時代(二十四歳)までにすでに克明に分析し、また莊子思想の根幹をつかんでいたといえる。これに対し、『老子』は、青年期においてはさほど重視していた様子はなく、老年期(五十一歳以後)になつて、老子の思想に専心した傾向がある。第二点。『莊子』・『老子』共にその思想内容を把握して引用していることには変りないが、『老子』からの引用は、天皇の賛嘆の文中に多く使用されているという特色がある。第三点。両者共にやはり自らの思想には及ばないとする立場で用いていることには変りない。

1 同様の例は十二例見出し得る。紙幅の関係で本論文ではその内五例を示した。例示において、(莊)とあるは『莊子』の略、(性)とあるは『性靈集』の略、(三)とあるは『三教指帰』の略、なお各引用例の最後に、(莊)は摘出したところの篇名を、(性)は『弘法大師全集第三輯』の頁数を、(三)は儒教・道教・仏教のいずれに相当しているかを示した。

2 「螳螂怒臂当三車轍」のたとえは、『莊子』天地篇にも見える。ただ「螳螂窺蟬」「螳螂之斧」などのたとえは『莊子』以外にも見える。

(高野山大学助教授)